

1 2 教員の資質の維持向上の方策

本学には教員個々人の教育・研究能力の維持向上や事務職員・技術職員等を含めた管理運営や教育・研究支援の充実を図るために「FDカリキュラム委員会」が設けられている。本委員会の主たる任務は、ファカルティ・ディベロプメントの研究開発、授業評価、カリキュラムの検討改革及びFD研修会の実施である。

本学のFD活動は、最初、外部の講師を招いて、FDのあり方、学生による授業評価の活用方法、プレゼンテーション・ツールとしてのパワーポイントの使い方などについて講演会を開催し勉強を続けてきたが、平成16年には学内で研修会が開けるまでに成長した。今後ともこのような講演会・研修会を定期的で開催して研鑽を重ね、教職員の意識の向上を図り、稔り豊かなFD活動を展開し、併せて、教職員の教育研究セミナーへの参加を推進していく。

学生による授業評価に関しては、平成14年5月15日の教授会で「学生による授業評価に関する基本方針」が策定され、第1回授業評価は平成14年6月の第5週から7月の第3週までの間、2回に分けて実施された。これは、外国語学部が完成年度に達したのを機に、開学以来4年間の教育課程を検証し、授業改善のための基礎資料を収集する目的で、全学の教育体制に関する〈共通型〉と個々の授業に関する〈個別型〉に分けて実施したアンケート調査である。〈共通型〉は(1)基本的事項、(2)授業全体について、(3)基礎ゼミナールについて、(4)その他の4項目14問からなり、〈個別型〉は(1)基本的事項、(2)当該授業科目の選択理由、(3)学習態度、(4)授業内容について、(5)授業方法について、(6)授業の満足度について、(7)その他の7項目29問からなっている。いずれの形式も「その他」は、授業の良かった点又は改善してほしい点を自由に記述させた。その学科目別集計と分析とを行ったのが『自己点検・評価報告書2002』(平成15年1月)で、平成16年3月には詳細な報告が学内研修会で行われ、双方向授業及びパワーポイントの有効性について貴重な示唆があった。

第2回目の学生による授業評価は、平成16年度後期開講になる大学・大学院及び短期大学部の全授業科目を対象に平成16年11月から12月にかけて実施した。調査対象が外国語学部1学部から全学に拡大されたこともあって、調査項目も第1回の7項目29問から4項目39問と自由記述に変わった。その調査結果は、学科目別集計だけでなく、全授業科目について質問項目の5段階評価の中間値を担当者の氏名を付して『2004年度北海道文教大学年鑑』(CD-R)に収録されている。この調査表は、教室における教員のパフォーマンスのすべを授業の受け手が評価したものとして、調査対象が大学・大学院及び短期大学部の全授業科目であること、調査項目が39問と多岐にわたる点で、画期的なデータの公表ではあるが、あまりにも細かすぎて全体像が分かりづらいという欠点があった。

その反省の上に立って、第3回目の授業評価は、質問項目を次の19問に減らした。

- (1) シラバスの記載内容は授業の実態に適合していましたか
- (2) 初回に授業の目的や到達目標について確認がなされましたか
- (3) 初回に成績評価基準と評価方法について説明・確認がなされましたか
- (4) 授業は十分に準備されたものでしたか
- (5) 教師の話し方（マイクの使い方を含む）は聞き取りやすかったですか
- (6) 黒板などの字は見やすかったですか
- (7) 教材（テキスト、プリントなど）の使い方は適切でしたか
- (8) OHP、ビデオ、コンピュータなど視聴覚機器の使い方は適切でしたか
- (9) 授業内容は理解しやすいように配慮されていましたか
- (10) 授業内容への関心を高めるように工夫していましたか
- (11) 授業中の雰囲気は、学習に適した状態に保たれていましたか
- (12) 教師は学生の質問によく対応していましたか
- (13) 教室外での学習等について適切な指示・助言が得られましたか
- (14) 担当教員と補助教員（助手や補佐員）の連携は良かったと思いますか
- (15) 実験・実習器具、パソコン等の使い方の指導は十分でしたか
- (16) 授業環境（設備、エアコン、外部の騒音対策等について）は快適でしたか
- (17) 安全や人格・プライバシー保護についての配慮がなされていましたか
- (18) あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか
- (19) この授業におけるあなたの充実度・満足度を評価してください

このように簡素化された質問項目について、＜大変よい＞＜少しよい＞＜どちらともいえない＞＜少し悪い＞＜大変悪い＞の5段階評価させ、その結果を授業科目ごとに履修人員、アンケートに答えた人員、5段階評価の中間値の平均を付して公開することに改善した。このような計画で、平成17年度の学生による授業評価は、7月末に前期開講の全科目を対象に全学的に実施した。その結果については、現在集計中で、予断できないが、学生がよしとする授業の全体像が数値的に示され、公開授業選択の有力な手がかりになるのは確かなので、今後、この形式で学年に1回、（前期又は後期に1回ずつ）学生による授業評価を実施していく計画である。

学生による授業評価は、もとより、授業を改善するための基礎資料を収集するための作業にすぎない。アンケート調査で得られたデータをもとに改善策を立て、授業にフィードバックする方法の開発と組織作りがなされなければならない。そのための方策としてまず、(1) 授業評価の結果を『年鑑』等で公表するだけでなく、適切な解説を付け、学生が容易に参照できるようにする、(2) 授業評価の自由記述について、ワープロで起こしたものを日本語の形態素解析システム「茶筌」等を用い

て、各種相関関係の科学的分析を開始する、(3) 授業形態・授業方法の適切性、有効性を検証するために教員による授業の自己評価を実施する、(4) 公開授業を推進する。以上4点から着手し、これまで教員個々の自己研鑽に任されていた教員の資質の維持向上を学科、学部単位で取り組んでいく体制を作る。そのためには、平成18年度から導入予定の教員の教育活動、研究活動及び社会貢献度の自己申告制並びに本学の教養教育の問題、FD活動及びカリキュラムの検討改革等を総括的に研究・開発する「教育開発センター」が大きな役割を担うことになるであろう。